

2006. 5. 25

No.139



編集 樋口 みな子

E-mail
minginga@agate.plala.
or.jp
郵便振替
「銀河通信」02740-7
-56535
(6号分1,000円)

若葉が目にしみます

雪解けが遅く、ようやく暖かくなったと思うと、花冷えや、みぞれの降るような寒さが戻ったりと気候が安定せず、体がついていきません。みなさまはお元気でしたか？

春がいつまでも足踏みしていましたが、木々が芽吹き、野の花もエゾエンゴサクからミズバショウ、ザゼンソウに始まり、ニリンソウやタチツボスミレなど百花繚乱です。我が家のささやかな庭には、スズランが可愛い蕾です。まっすぐに伸びたナナカマドの緑がまぶしほどに茂っています。

野山を歩くのが楽しい季節になりました。

先日、友人と銭函天狗岳に手稲鉾山側から登りました。まさに初夏の陽気。山が青く霞んで見えました。ブルーヘイズ（青いもや）に包まれているからだ和本から知りました。そのブルーヘイズは樹木の葉が発散するテルペンという物質がもとになってできるそうです。ふくいくとした森の香りが包んでくれて、センダイムシクイがチョコピーと囀り、萌黄色に芽吹いたばかりのシラカバやミズナラの木々のそちこちに野鳥の姿があり楽しかったです

エゾエンゴサク、ニリンソウの群落、キクザキイチゲ、シラネアオイ、ヒトリシズカが可愛い。葉が円心形なのがタチツボスミレ、三角状の卵形がミヤマスミレと確認しながら5kmの林道を自然と対話しながら歩きました。

通信を書いている今日（22日）はリラ冷えです。いつまでたってもない文章が書けません。野鳥の囀りのような滑らかな美しい文章に憧れますが言葉が出てきません。今号も拙い銀河通信にお付き合いいただければ幸いです。（みな子）



銭函天狗山の頂上にて（桂子さんと）



キクザキイチゲ

1年越しのペンケ山の分水嶺踏査を終えて

昨年のゴールデンウィークに、パンケ山、ペンケ山を経て天北峠までの分水嶺踏査をしましたが、ペンケ山の稜線を残してきました。この2キロ弱の未達成分水嶺に1年ぶりに取り組みました。

C L長谷川雄助 S L田島祥光 朝日守 吉野勝夫 助田陽一 助田梨枝子 樋口みな子 鶴岡節子

4月14日(金)、札幌を10時に出発。中川町のポンピラ温泉に3時に到着。

途中の国道からは懐かしいパンケ山、切り立った稜線のペンケ山もくっきりと姿を見せて、今度こそは未達成分水嶺を踏査したいとの思いを新たにす。採石場からの林道を確認して、帯広チームと合流した。

15日(土)、昨日の青空はなく、うっすらと絹布を覆ったような天気。ポンピラ温泉を7時半に出発。8時10分、採石場から600m入った北大演習林の林道入口からツボ足で歩き始める。途中から雪が和らぎ、スノーシュー、カンジキを装着してひたすら林道を歩き11時30分送電線鉄塔が立つ377mの分水嶺峠に到達した。

左手にパンケ山、右手にペンケ山がすっきりと青空に美しい姿を見せるていた。

昨年小雨降る中で、GPSを片手に、長谷川Lが行く方向を定めるのに苦労しながら辿った分水嶺に立ち、そのときのメンバーと「良くぞ歩いたね」と語り合う。いままでの汗ばむような陽気から、一転して風が強くなり出す。

明日の天気は崩れるとの予報から、長谷川Lと田島SLが相談し、今日中にペンケ山に登り、未達成分水嶺踏査をしよう判断し、私たちに行動計画を説明した。

12時、351mのコルにテント1張をたて、重いザックザックをデポ。昼食をすばやく終え5時までにテントまで戻る決意で、重いザックをサブザックに変えて、長谷川Lをトップにペンケ山を目指して歩きはじめた。吉野さんと朝日さんにはテントキーパーをしてもらう。6人のどうしてもやり遂げたいとの熱い思いがひしと伝わってくる。



昨年5月に踏査した時は雨がそばつき、熊の足跡があったり、見通しが悪くなんとも心細かったが、今日は春の薄日を浴びながら広い雪原を快適に進むが目指すペンケは、やせ尾根の直登。スノーシューで大丈夫だろうか?と不安がよぎる。高みにつれて風が強くなっていく。この急斜面が難所。長谷川Lは懸命に一步一步、キックステップを刻みながら高度を上げて行く。ペンケ山はとて716.3mの山とは思えないほど、端然と上空に白く輝き、高度感があつた。足を踏み外したら大変なことになる。P434に辿り着きほっとしたのも束の間、さらに3つのピークを越えていくのだった。

14時15分、ようやく6人のメンバーが頂上に立った。烈風の中で堅い握手をかわし、写真を取り合い、さらに未踏査の分水嶺、頂上から南の稜線を下る。北側の稜線と違う一直線に伸びる急傾斜の痩せ尾根に足がすくむ。東側が垂直に切れ落ち、西側は僅かに雪のついたハイマツが密生している。なおも長谷川Lがトップで慎重に足場を探りながら降りていく。ようやく広い雪面に出て、長谷川Lが536mをGPSで確認し「繋がったぞ」と宣言。

そこから東側の急斜面を、標高線沿いにトラバースして行く。途中、遅れて分水嶺w p歩いて来た吉野さんと合流し、キャンプ地に17時25分に辿り着いた。

その夜は、踏査を達成した喜びがテントにあふれ、賑やかに夜は更けていった。

16日は無事に下山するだけ。風が強くなり曇り空。今にも雨が降りそうだ。昨日の好天を逃さず、一気に踏査した行動を喜び合う。林道を下るとペンケナイ川のせせらぎが聞こえ。前日は咲いていなかった、エゾノリュウキンカが黄色い蕾を開いている。11時20分、ペンケナイ林道始点に到着して、道北最後の踏査を終えた。(樋口みな子)





5月21日、市内北区Lプラザで開催された北海道市民環境ネットワーク（略称「きたネット」）の総会で、北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会の活動について報告しました。

左は高橋健さん（日高山脈ファンクラブ事務局長）、右は岩村和彦さん（山のトイレを考える会副代表）です。

樹氷のダケカンバが詩的な狭薄山

5月3日、素晴らしい天気恵まれて、友人と6時40分空沼登山口から狭薄山に登りました。歩き始めの30分でクマガラにも会うし、幸先のいいスタートです。万計山荘までと途中の沼までは、つぼ足で。それからスノーシューに履き替えて登りました。いくつものダケカ



ダケカンバに咲いた樹氷の花

ンバに乗った樹氷が、シャリシャリと散って、まるで一幅の絵のようで、美しかったです。

空沼岳に登る人は数組いましたが、私たちの後から、すごい勢いで登って行った年配の男性がひとりだけでした。熊が怖いので心強かったです。近くに見えるのに、狭薄ははるかに遠かったです。三角錐の急斜面は、スノーシューで逆ハの字で進みました。12時45分頂上に。

はじめて見る狭薄からの、360度の眺望に感激でした。羊蹄山、余市岳、無意根、夕張岳、芦別岳、増毛の山々が見渡せ、至福のランチタイム



狭薄山へのルート（写真後方の稜線を辿り、狭薄山の痩せた稜線を登る）

でした。

名残惜しいけれど、夕方までに登山口に着かなければと帰路を急ぎました。

朝はまだ雪が締まっていたのに帰りは雪が解けて沢水に。蕾だったエゾノリュウキンカも開いていました。登山口には15時55分着。



羊蹄山をバックに。狭薄山の頂上にて

快晴の羊蹄山を滑る！



山岳会の友人から「羊蹄山にスキー登山するけど行こうよ」と誘われて、4月22日、マイクロバスで、京極に向かいました。中山峠でスキーの足馴染もしました。総勢20人です。

山荘周辺での3チームに分かれての雪洞作りや、雪をいかに高く積み上げるかのゲームで盛り上がりました。また、羊蹄山をバックに、何個ものランタンに灯をともし雪明りを楽しみました。

23日も快晴。山スキーチームスノーシューチーム、登山ガイドにスキーを背負って貰う人などレベルに応じたチームに分かれて登り始めました。

私は山スキーは下手なので1200mの森林限界まで。頂上まで行かずとも眺望は素晴らしい。余市岳、無意根が白く輝いていました。あんな急斜面、どうやって登るんだろうと思っていたので、絶好のスキー日和に恵まれて下手ながらも楽しめました。麓に近くなるにしたがって雪が柔らかくなり、スキーが刺さってつんのめり怖かったです。とにかく格好は悪くても安全に降りることばかり考えていました。

麓に降りてから羊蹄山を仰ぎ見ると、シュプールが、銀色に輝いて美しかったです。



北方野草園で春を満喫しました

たまには、厳しい山ばかりではなく、お花の鑑賞会もと山岳会で企画しました。5月13日、札幌から車に便乗しあい、旭川郊外の嵐山・北方野草園に着いたのは大幅に遅れて11時でした。



担当の朝日守さんがボランティアガイドの山口正弘先生を紹介。野草園を案内しながらレクチャーして下さる。国内でも有数の野草の宝庫であり、約600所もの植物が生息しているとの説明に、みな真剣に耳を傾けていました。野草園では一昨年台風で、400

本の大木が倒れ、動植物にも大きな影響を及ぼしたと語りました。エゾエンゴサクとホソバエンゴサクの違いも知ることができました。

カタクリ、シラネアオイ、キバナノアマナ、アズマイチゲ、キクザキイチゲ、サラシナショウマ、ヤマブキショウマ、サンカヨウ、フッキソウ、ヒトリシズカ、覚えきれないほどの花の種類之多さに感激でした。

こんなに素晴らしい自然なのに、地元の市民はほん

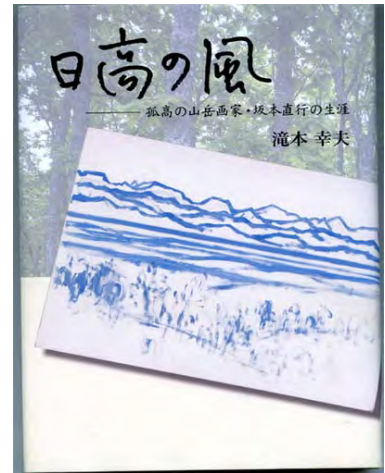
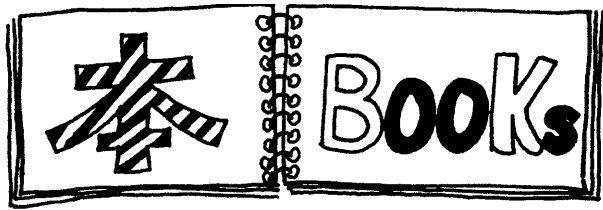
のわずか。山に行ってもなかなか出会えない花がたくさんあるのにと少し残念な気がしました。

野草を観察したり、写真を撮影したりと楽しんだ後、嵐山展望台に登り、大雪山系と十勝岳連山の山座同定。眼下には石狩川が街の真ん中を流れ、川の街、旭川の風情を味わい、昼食をとり解散しました。

帰りには版画家として活躍する渋谷正巳さんから、大雪山系と十勝連山の版画が参加者全員にプレゼントされるなど、実りの多い観察会を終えました。



エゾノイワハタザオ



『日高の風』 孤高の山岳画家・坂本直行の生涯

滝本幸夫著 中札内美術村1500円

問い合わせ(0155-68-3003)

山岳画家の坂本直行さんは、今年生誕100年になります。直行さんの「開墾の記」は広尾村野塚の原野での苦闘の記録です。骨太で、直行さんの情熱が伝わる文章と、温かいタッチで描かれた日高の山々や、植物画が素敵で私の青春の大切な本です。

当時自然保護団体「大雪と石狩の自然を守る会」の機関紙の編集をしていましたが、この本を紹介しました。

直行さんの娘夫婦と知りあいたった縁で、札幌の自宅でツルさんのお話を聴く機会がありました。巡り巡って、直行さんと縁の深い滝本さんとも、日本山岳会に入会したおかげで知り合うことになった不思議さを感じています。

しかも年に一回発行する「ヌプリ」の編集(滝本さんは編集委員長です)で単なる会員以上のお付き合いがある方です。

この本は、直行さんの生い立ちから、原野での開墾生活や、農民運動、画家として生きるまでの生涯を丹念に取材した評伝です。

はじめは、中札内美術村の坂本直行さんの人となりをお小冊子にして、記念展で入館者に配布したいとの意向が、六華亭の松橋さんの熱意で、ダンボールに眠っていた原稿がよみがえったことを滝本さんは明かしています。生きていたら新田次郎に書いてもらいたかったと打ち明けていますが、直行さんの妻、ツルさんとの打ち解けた交流がなかったら、この評伝は世に出なかったのではと思います。

あとがきにこんな一節があります。「坂本直行一北の山の巨人。自然児にして反逆児。組織や体制には絶対的に組しない。自然を愛し、何時も自然と供にある。風のように人生を歩く。歩きたかったに違いない。歩けなかったから、直行さんの人生は壮絶を極めた。それはなぜかと直行さんに今は聞きたい」と。

坂本龍馬の新時代を目指して激動の世界へのめりこんでいった熱情の息吹を、そっくり引き継いでいるかのような祖父、直寛と直行。直行さんが農民運動に奮闘したことは意外に知られていない。著者は「自分の希望する文化の萌芽はやがて肥沃なる土壌になりうるはずである。直行は再び力強く鋤を握りしめるのであった。」とあり、直行さんの気概が伝わってきます。

50歳を過ぎてからの後半生は画家として活躍しましたが、「直行さんの魂は、日高の風になって、誰に束縛されることなく、自由闊達に走っているに違いない。」あとがきより。

直行さんの息づかいが伝わるような労作です。日本山岳会の会員でもありました。是非、お読みください。

私もつい先日、中札内美術村で直行さんに出会ってきました。時間がありましたら、広尾の

広大な大地と、日高の山々の素晴らしさを味わってもらえたらと思います。

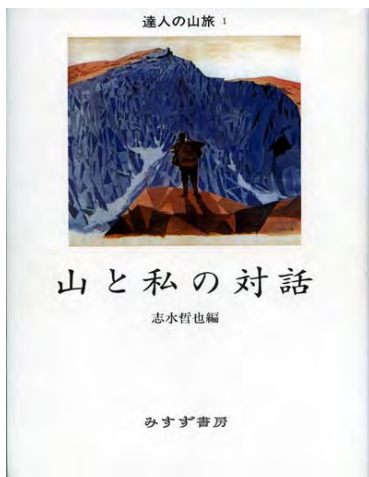
『山と私の対話』 志水哲也編 みすず書房 2000円+税

ソククライマーとアーティスト。山と自分自身に一对一で真摯に向き合う13人の肖像です。

そのひとりである、山野井泰史さんの講演を聴く機会がありました。数々の偉業を成し遂げた人とは思えぬほど静かで謙虚な人でした。

「山だけは自分を発揮できる。普通では考えられない力と技術と知識を出せる。一ソロは自分の本当の姿を知るうえでの最高の手段だと思う」と述べています。

ソククライマーの記録は生が研ぎ澄まされてすごい人たちだなと思います。



編者もかつてはクライマーでした。「文章であっても写真であっても、昨年にしていくのは孤独な作業である。自然と自分が一体一で向き合い、何かを創り出そうという行為は、やはり、ソロクライミングしているときの精神状態でもあるように思う」とあります。

田部井淳子さんが、何度もの遭難から逃れてきた体験を本や講演で聴きましたが、もう遭難の危険がある山には行かない、ヒマラヤの自然を守る活動をしていると話していたことに共感しました。ソロクライマーだけを美化する必要もないと思います。

私にとって、小さな山であっても、楽な山はひとつもありません。険しい登りにあえぎながら呼吸を合わせて歩を進めているうちに、自然と一体になっている自分を発見します。無心になれる山が好きです。私は私と改めて思いました。

巡り合った人々 1959-2005

『旅の途中』著 筑紫哲也 朝日新聞社 1800円+税

半世紀にわたるさまざまなジャンルの人々との交遊録と取材の覚書です。新聞記者、雑誌記者、テレビキャスターとたくさんの経験を重ねた著者ならではの多彩な顔ぶれです。

序章で、人と会うのが苦手だったとあり、意外な一面が明かされます。「もともと内気で恥ずかしがりやなのに、この職業で求められているのは人並み以上の強引さと、取材源に食い込んでいくコミュニケーション能力なのに、警察回りで、犯罪や災害被害者の顔写真を関係者から借りてくることに成功したことがなかったと明かしています。

私も好奇心は旺盛なのに、人前で話すのがずっと苦手でした。



時々人に会ってインタビューする機会がありますが、引っ込み思案なので、深いところまで立ち入れないと感じていましたので、すごく共感しました。

田中角栄や三木武夫などの政治家、美空ひばりや、芥川也寸志、黒澤明、といったそうそうたる人物の人間性が、時に鋭く、時に温かく描かれています。

私はニュース23での著者の映画や音楽紹介が大好きです。本書でも政治家との交友よりも圧倒的に、文化人との交友が深く面白いです。

同じ年齢（1935年生れ）の小澤征爾との交友が印象的『セイジがこんなにも広く世界で愛されている秘密は、音楽的才能もさることながら本人の「悪意の不在」だと思う。それが相手方の底意や思惑を解除し、溶解させてしまう。』と記してあり、人間性の素晴らしさが豊かな音楽を生み出しているのだと納得しました。

題名は著者がニュース23で、たびたび紹介していた「清河への道」を歌った、在日2世の新井英一の作品「旅の途中から」からつけたという。やはり筑紫さんは文章の人だなと思いました。

白神岬でフィナーレを飾る

日本山岳会北海道支部は、1, 132kmの北海道中央分水嶺踏査踏査を3年越しで取り組んできました。フィナーレは道南の白神岬です。

4月29日、札幌から360km車で走り、福島町に山岳会会員や会友が集まりました。東京からは平山善吉会長がはばる来られ、一緒に分水嶺を歩くことに。その夜は盛大に天気祭りをしましたが、翌日の予報は雨。



30日、小雨が降り、歩けるかなと心配しましたが、最南端の白神岬駐車場につくころには、青空になり横内泰美リーダーの指示で白神灯台横の急斜面を登り、分水嶺尾根に着きました。さらに全員で肩まで登って見下ろすと、左に太平洋、右に日本海が見える。これぞ分水嶺。私たちの集大成がここでフィナーレを迎え感無量でした。

私は昨年5月に踏査したイソサンヌプリを思い出していました。オホーツク海と日本海を分ける分水嶺に立った感激は今も鮮やかです。

こんなにはまるとは思っても見なかった分水嶺踏査。吹雪あり、雪崩れ斜面あり、当人よりも家族には心配をかけました。「言い出したら、絶対に行くんだから」と、あきれながら協力してくれた家族に感謝です。ありがとう！

映画

『ナイロビの蜂』

イギリス 監督 フェルナンド・メイレス

ヒロインのテッサはケニアで「スリービーズ」（三匹の蜂）という製薬会社が、結核の新薬開発にケニアの子どもたちを人体実験に使い、何人もの犠牲者を出していることを知ります。その事実を告発したために彼女は暗殺されます。ナイロビの英国大使館の外交官である夫ジャスティンが、その真相を突き止めるドラマであり、ラブストーリーでもあります。

行動的なテッサと庭いじり趣味の穏やかなジャスティン。二人の出会いはジャスティンの講演を聴いたテッサが「あんないい加減な根拠でイラク戦争を始めたことに外交官としてどう思うか」と質問したことから。

ジャスティンが真相を究明していくうちに、大手製薬会社と、外務省高官の癒着を突き止めます。



この映画ではアフリカの索漠たる大地の描写が素晴らしい。ふたりの痛切な愛が歌い上げられますが、医療も十分に受けられない、貧しい人々の現実はあまり伝わってきません。

ジャスティンは、テッサの魂を追うかのように、アフリカでの恐るべき人体実験の真実に分け入っていきます。二人の愛を確認する旅でもありました。

サスペンスとしては見ごたえがりましたが、虐げられているスラムの人々の生活が描かれていないのは残念です。テッサのやさしさをもっと伝わったのと思いました。

『ある子供』

ベルギー・フランス ジャン・ピエール&リュック監督



盗品を売りさばき、その日暮らしをしている20歳のプリュノは、生まれたばかりの子どもまで売ってしまおうとする。そんな彼が、どうやって大人になるかという物語です。

他者を思いやる気持ちもなく、自分本位にしか生きられない青年は、日本でも増えています。監督のダルデンヌ兄弟は、果たしてプリュノのような青年に、人間としての再生や希望への転化はありうるのだろうかという問いかけに答えていきます。

主人公を演ずるジェレミー・レニエが、刹那的

な生き方しか出来ない青年を演じ、リアルでした。

ラストシーン。プリュノはソニアの前で、はじめてとめどもなく涙を流します。何かを洗い流すかのように。他者と触れ合うことで人間性を取り戻し、希望の光を見いだします。どんな閉塞的な状況にあっても人は変わることができるのだというメッセージが伝わってきました。

音楽的効果を排除して、私たちに深く考えさせるドキュメンタリーのような映像で、余韻が残りました。

お便り

◆イソサンヌプリ踏査報告は懐かしい地名が出てきました。知駒岳は遠足で登りました。敏音知岳には友人がそこに住んでいましたので登山したことがありました。あらためて、みな子さんのされている分水嶺踏査のスケールの大きさを思いました。すごいことですね。そしてご苦労さまでした。山に登りたい気分させられました。みな子さんの文面で行った気分を味わわせていただきました。（札幌市 K・Kさん）

◆短冊便箋、高村智恵子に惹かれました。「青鞥社」は1911年に平塚らいてうが主宰し結成した女流文学結社。9月に機関誌「青鞥」を創刊。青鞥はブルーストッキングを訳したもの。青鞥派は1750年ごろ、英国のモンターギュ夫人の興した文芸サロン。ある男子の常連が青靴下をはいていたことに由来するニックネーム。以来女流作家、文学愛好婦女を紹介する呼び名になった。みな子さんもブルーストッキングは居て闊歩してください。ベレー帽がよく似合います。（札幌市 T・Mさん）

◆なんとすてきな旅だったのでしょう。エゾエンゴサクとカタクリたちが一緒になって最高の見せ場を惜しげもなく、たっぷりと現してくれましたね。おかげさまで。感謝です。又の日を楽しみに（東京都 J・Hさん）

◆4月28日から始まった梨の花粉交配はたくさんの人にお手伝いいただいて、3日無事終了しました。子ども3人と大人14人。お祭りのようにぎやかな中で疲れを忘れるくらい楽しく終えることができました。今度は田植えの準備です。目に青葉、山ホトトギス、初がつお。新緑の美しい季節になりました。（福島市 A・Iさん）

春のはかなきもの

GWをはずして東京の友人夫婦が来札。あまり遠くなくて静かに自然を楽しめるところはないかと、本や、インターネットなどで調べて行ってきたのは浦臼です。例年なら、カタクリは終わっている時期なのにその場所だけが一面のカタクリとエゾエンゴサクの大群落なのです。私も毎年、いろんなどころのカタクリを見てますが、こんなにもどこまでもびっしり咲いている群落は初めてでした。

スプリング・エフェメラル。森の・はかなきもの。たったひとときの、はかない命をけんめいに咲く姿に夢の世界にいるような感動を覚えました。カタクリもエゾエンゴサクもアリが種を運んでくれているのです。カタクリの開花には8年もかかるのですから大事にしたいですね。



購読料をありがとう 3. 29～5. 20

但馬桂子（江別市） 藤内英夫（札幌市） 八木橋貞美（札幌市） 渡辺妙子（札幌市） 仲俣義雄（札幌市） 青木博信（札幌市） 京極紘一（札幌市）

合計11,000円は印刷送料に使わせていただきます。ありがとうございます。

購読を中止される方はお知らせください。よろしくお願ひします。